

▼松登りの練習に精を出す江木さん



江木さんは、落下する恐怖地域が一つになるにつれて、松を立てるなど、総出で神楽の準備に参加します。江木さんは、落下する恐怖

7年間に一度執り行われる「行波の神舞」の式年祭が、4月6日・7日に開催されます。行波地区を流れる錦川の河原に四間（約8m）四方の神殿が組まれ、演目12座全部の神楽がおよそ15時間をかけて披露されます。中でも一番注目される「八関」は、高さ25mの松を立て、そこに演者が這い上がり、そこから張ら

れた縄を降りてくる神楽で、この度「八関」で松登りを演じることになったのが江木さんです。行波で育ち、幼少の頃、気が付いたら神楽を舞っていたという江木さんは、消防士という職業柄から松登りに選ばれました。近くの山に高さ約10mの木に20mほどの縄を張り、初めて練習した時には、消防用ロープとは違い、太

心よりも行波の人たちのためにも最後までやりきらなくてはいけないとの責任を重く感じるようになったそうです。現在、岩国行波の神楽保存会は、幼児からお年寄りまで約40人で構成されていますが、時代の変化とともに神楽団員や次の世代を担う新舞子の減少など、継承活動に対してはさまざまな問題を抱えています。「200年以上続く伝統ある行波の神舞は、現代の人にはなかなか理解できないかもしれませんが、神秘的なものを感じる舞です。今後も継続してこの伝統芸能の伝承に努めていきたいと思っています」と話してくれました。江木さんは最後に「4月6日・7日の式年祭にぜひお越しください。観る人も楽しめるし、すごいですよ。観る人に感動を与えることのできる神楽を目指します」と意気込みを話すと、松登りの練習に向かいました。



▲八関（松登り）



▲前回の八関



伝統の舞に挑む

Vol.48

江木 賢宏さん
(行波在住)

国指定重要無形民俗文化財である「行波の神舞」の八関で、高さ25mの松に登り、そこから張られた縄を降りてくる松登りに挑戦する。
※本祭(神楽)
4月7日(日) 9時30分～
「八関」16時15分～

